

科目名 Course Name		開講年次	開講学期	曜日・時限
解剖学 anatomy		1年	前期	別途、時間割参照
単位数	授業の形態	授業の性格		履修上の制限
2単位	講義	選択	(栄養士資格必修)	栄養士養成課程限定
当該科目の理解を促すために受講しておくことが望まれる科目				
栄養士資格取得に必要な科目				
同時に履修しておくことが望まれる科目				
栄養士資格必修				
担当者に関する情報				
氏名	研究室の場所	オフィスアワー		電話番号・メールアドレス
廣田伸樹	非常勤講師室	木曜日・5時限講義前・後を予定		授業中に指示します
授業の概要				
人体の構造と機能の基本を修得し、細胞やそれが集まって出来る大きな器官までの主な名前と働きを理解する。さらに、脳や内臓などの主要な構造と互いのつながりを覚え、主な疾患やその対策や対処の基礎を理解する。併せて栄養士の基本となる身体での栄養成分の利用について学習する。				
授業の目標				
①生体を取り巻いている環境は常に変化している事を認識することができるようにする。 ②生体を構成する細胞を取り巻く物理的、化学的、生物学的な環境の違いを分類することができるようにする。 ③生体機能における食品及び栄養素の関与や関連を認識することができるようにする。				
授業の方法				
30分ほど学生が興味あるテーマを調べて来たものを発表する（全員一回）。授業は講義とプリント、ビデオも取り入れる。学生は積極的に講義に参加するよう努力してください。				
学習の成果（学習成果）				
①栄養士資格を取得するうえで必要となる条件である「解剖学」に係る内容や働きについて具体的に解説することができる。 ②生体内の臓器の位置を具体的に正確に解説することができる。 ③生体内の各部位、細胞、器官までの主な名称と働きを正確に分類することができる。				
授業のスケジュールと内容				
第1回目	授業の概要を説明する。授業の回数に応じてグループわけを行い、発表の順番を決める。			
第2回目	学生の発表。人体の発生について学習する。受精、着床、胚の分化など。内胚葉、中胚葉、外胚葉の理解。			
第3回目	学生の発表。細胞の種類と構造を学び、細胞核にある染色体や遺伝子の構造、細胞分裂の仕組み。常数分裂と減数分裂の違いなどを理解させる。			
第4回目	学生の発表。皮膚と付属器の構造および骨格系の学習。骨の種類、なめ、構造、繋がり方、関節の構造など。			
第5回目	学生の発表。筋肉の種類と構造の学習。骨格筋と平滑筋。収縮の仕組みと神経支配、アセチルコリン。主な筋の名前。			
第6回目	学生の発表。神経系の学習。神経細胞とグリア細胞と回路網。中枢神経系（脳と脊髄）と体性神経系の繋がりを理解する。			

第7回目	学生の発表。自律神経系と感覚器の学習。自律神経の構造と感覚器の構造の理解。特に眼と耳の構造。	
第8回目	学生の発表。内分泌系の学習。外分泌腺と内分泌腺の区別。内分泌器官の名前と場所、ホルモンの名前を理解する。	
第9回目	学生の発表。血液成分の学習。赤血球と白血球と血小板、血漿の成分。免疫への関与を理解する。	
第10回目	学生の発表。心臓と血管の構造の学習。脳・延髄を通しての心臓や血管の制御を理解する。	
第11回目	学生の発表。動脈と静脈、毛細血管の区別。大循環と小循環の血液の流れの順序を理解する。	
第12回目	学生の発表。呼吸器系の学習。肺の構造と気管、気管支、肺胞の区別。中枢神経からの肺の調節を理解する。	
第13回目	学生の発表。消化器系の学習。口から肛門までの消化器の名前と、門脈系と肝臓・胆嚢・膵臓の構造を理解する。	
第14回目	試験(試験問題の解説も含む)	
第15回目	学生の発表。泌尿器系の学習・腎臓、尿管、膀胱の構造及びネフロンの構成と神経等による調節を理解する。(まとめを含む)	
成績評価の方法と基準		
評価の領域	割合	評価の基準
授業参加態度	20%	①講義の目的・内容をしっかり理解し、積極的に参加する(S=90評価)。②メモやプリントを積極的に利用する(A=80評価)。③集中して講義に参加しないものは評価が低い(場合によりD評価となる可能性)。
レポート		
調査報告書		
小テスト		
試験	60%	①全出題項目が理解できている(S=90評価)。②重要な出題項目が理解できている(A=80評価)。③基本的な問題が理解できている(B=70評価、又はC=60評価)。
発表内容(態度含む)	20%	①課題に対し、献身的に参加する(S=90)。②課題に対し、消極的な参加の場合には評価が低い(場合によりD評価となる可能性)。
その他		
教科書と参考図書		
プリントを使用。		
履修上の留意点・ルール		
時間の関係で授業では触れなかった疑問を自分で調べて、それでも分からないところを先生に質問すること。		